

近畿北部型装飾器台の出現と展開

桐井理揮

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

近畿北部型装飾器台の出現と展開

桐井理揮

1. はじめに

本論では、丹後周辺における装飾器台について、資料集成を行うとともに、出現と展開過程について検討を行う。これまで装飾器台について論じた各論の中で、丹後周辺に多出する型式の装飾器台について、丹後型あるいは丹後系と呼称されてきたが、丹後だけでなく丹波、若狭など後期に擬凹線文土器様式を共有する近畿北部地域に広く分布することから、本論では「近畿北部型装飾器台」と呼称する^(注1)。

2. 近畿北部における装飾器台の研究史

近畿北部における装飾器台について検討を行う前に、各地における装飾器台あるいは結合器台の研究史をごく簡単に整理しておこう。

装飾器台は北陸で多出する器種であり、弥生時代後期末に出現し古墳時代前期まで存続する。1980年代までには月影式に初現があること、器台と有段口縁の鉢あるいは細頸壺がセットになって創出されたことが指摘され、新しいものほど身部が縦長となり、口縁部長が伸長し、脚部が矮小化するという基礎的な情報が整理された^(注2)。楠正勝は詳細な型式学的検討を踏まえ、その分類と分布を示し、北陸の祭式土器のセットを基として成立し、その背景に吉備～丹後～北陸の首長間のイデオロギーの共有があったと考えた。さらに、装飾器台の出現を月影式開始のメルクマールとし、後期後葉における祭式土器の頂点と指摘する^(注3)。堀大介は、その祖型について器台の上に壺が結合したのではなく、山陰系と東海系という異系統の器台が上下に重なったものと理解した。さらにその発生地として越前大野盆地付近を想定している^(注4)。

東日本においては、弥生時代終末期から古墳時代前期に盛行するいわゆる高杯型結合器台について各地で分析事例があり^(注5)、北陸南西部を起源とする見解が定着していたが、近年では伊勢湾岸に系譜を求める意見もある^(注6)。

一方、北陸の装飾器台出現に直接的な影響を与えたとされてきた丹後では、装飾器台について言及した研究は少なく、岸岡貴英が1991年に発表した論文がほぼ唯一の研究であ

る。岸岡は京都府北部を中心に15例を提示し、個別の詳細な観察に基づいて、丹後の装飾器台は規格的で保守性の強い器種と指摘する。^(注7)楠は岸岡の論を引きつつ、丹後と北陸の装飾器台の相違点を整理し、丹後の装飾器台が北陸南西部よりも先行して出現し、北陸南西部型もその影響下で成立したとする。その起源については、器台の上部に壺を載せた形という理解が一般的だが、先述のように器台を重ねたという見解もある。^(注8)

しかし、近畿北部では北陸や東日本と比較して出土点数が少なく、この土器自体に関する詳細な検討は、岸岡の研究以降進んでいない。本論の主眼は、近畿北部型装飾器台の形式学的特徴を整理し、その地域的展開を通して、北陸南西部型装飾器台との関係を再検討することである。

3. 近畿北部型装飾器台の展開

本節では、近畿北部における装飾器台の集成を行い、改めてその①型式学的特徴、②時期的変遷、③分布と展開、を整理する。

(1) 型式学的特徴

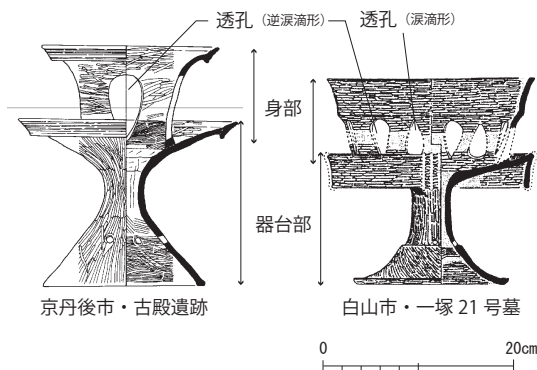
形状 岸岡や楠が指摘するように、器台部が在来系統の器台と共通する形状であるのが、

表 近畿北部型・北陸南西部型装飾器台の特徴

	近畿北部型	北陸南西部型
器高	高い (25cm 程度)	低い (21cm 程度)
器台部	単体でも存在	棒状有段脚 単体では存在しない
身部	縦長 (丹波では横長あり)	横長から縦長へ変化
口縁部	擬凹線文	無文。初現期はスタンプ文あり。
透孔	縦長で大きい。同一方向で2~5箇所。	小さい。交互に上下を違えるものが多い。

北陸南西部型と近畿北部型との最大の相違点である。近畿北部型の中でも丹波以南で出土するものについては、器台部が近畿北部型ではなく地元の器台が採用されるものも散見するが、基本的には器台が単体でも存在する型式であることに変わりはない。身部は有段口縁の器台あるいは壺上半部が形容されたような形状である。

透孔 透孔の形状は逆涙滴形が基本で、同一方向で4方向あるいは5方向に穿孔される。なお、図2に示したように、出現地と見られる丹後周辺ではほぼ逆涙滴形しか見られないのに対して、丹波では正位置の涙滴型あるいは楕円形が多いという地



域的な違いもある。また、若狭では北陸南西部型と同じく、三角形と逆三角形を交互に穿孔するものがある。時期的な違いもあろうが、地域性が反映されやすい属性といえる。

文様 「装飾器台」といっても器面の文様は乏しい。丹波では口縁部に波状文や円形浮文を施すものもあるが、あくまでも在来系統の器台にも見られる加飾の域を出ない。

調整 器台部は通有の器台と同様、外面は縦方向のヘラミガキ、内面は脚部はハケメ、上半はヘラミガキとヘラケズリが併用される。身部は、外面は横方向のヘラミガキで、内面の上半は横方向のヘラミガキ、下半はヘラケズリないし横方向のヘラミガキである。

胎土・焼成 丹後出土のものは砂粒をほとんど含まない精製された胎土で製作されたものが多く、淡橙色系の焼き上がりを呈するものが多い。一方、周辺地域のものは規範が崩れているものも散見する。

(2) 時期的変遷

先述のとおり、近畿北部型装飾器台と北陸南西部型装飾器台の違いは、器台部が器台として存在するか否かという点にある。近畿北部型は基本的には擬凹線文系統の器台の上部

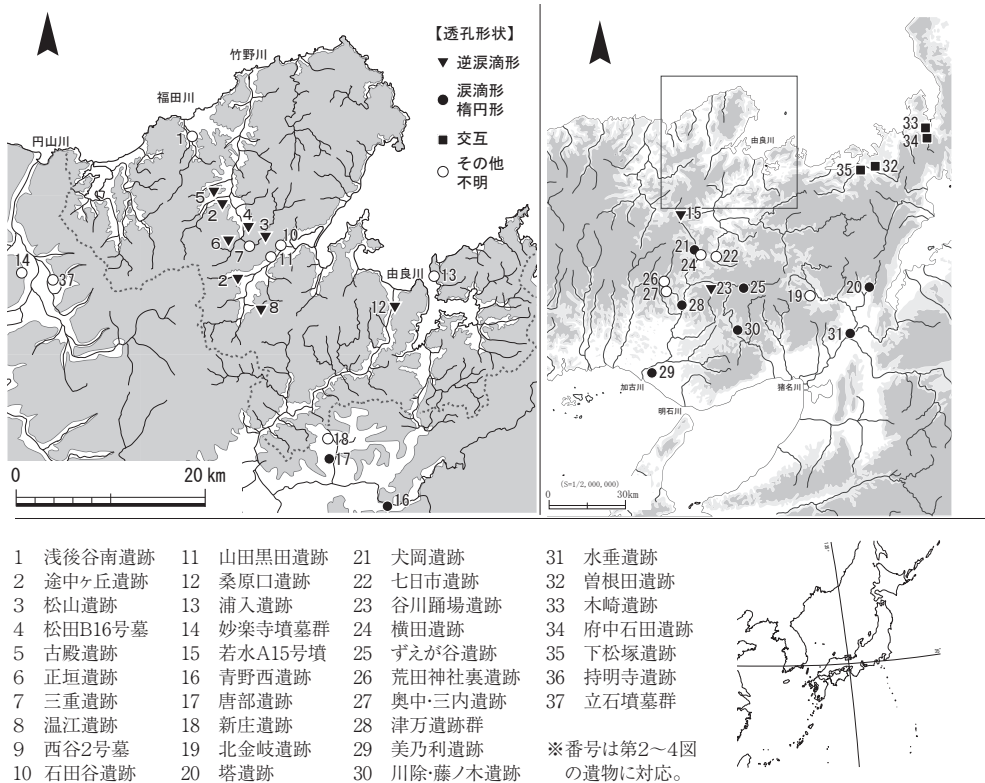


図1 近畿北部型装飾器台の分布

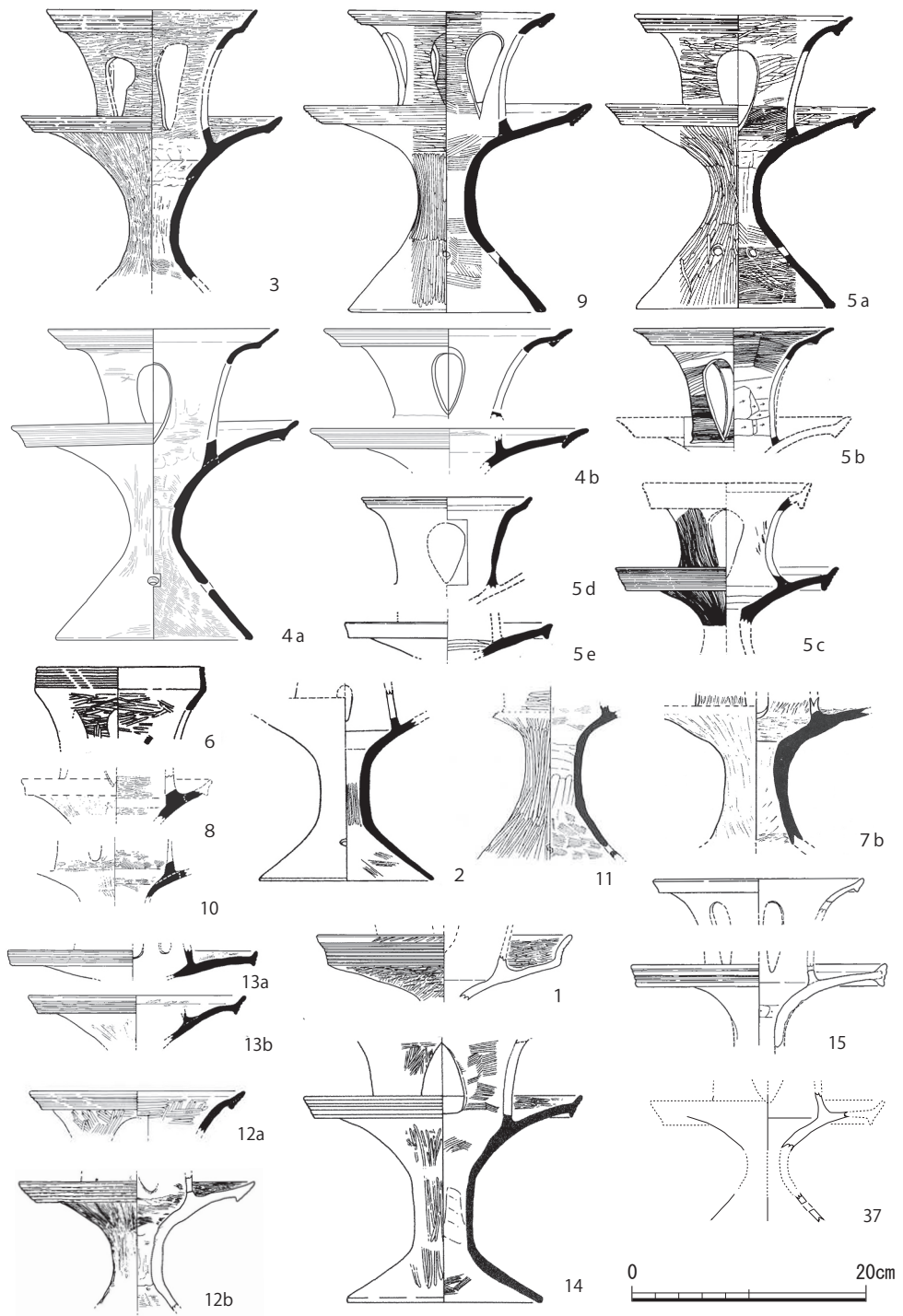


図2 近畿北部型裝飾器台の諸例(丹後・但馬)(番号は図1に対応)

に身部を結合した形状であり、器台部の型式変化によって時期を判断することができる。近畿北部における在来系統器台の変遷については、後期Ⅱでは円筒型の筒部に「ハ」の字の脚裾部と口縁部がとりつく形状で、後期Ⅲには筒部のくびれが次第に強くなり、口縁部の広がり^(注9)が顕著になるという変化がある。

現在得られている中で最も古い様相を呈するのは豊岡市妙楽寺墳墓群(14)で出土した資料である。器台が筒状で口縁部の拡張も顕著ではないことから後期Ⅱ-3に位置付けられる。身部は欠損が大きく涙滴形の上下は判断できない。後期Ⅱにおける出土事例はこの1点のみである。今後様相が変わる可能性もあるが、丹後に先行して但馬で事例があることは、装飾器台の成立を考える上で注意すべきだろう。

後期Ⅲには丹後でも出土事例が増加する一方で、全体の形が概ねわかるものは数例にすぎない。以下ではこれらの特徴をやや詳細に見ていこう。松山遺跡(3)では完形に近い土器が多量に投棄された溝から1点が出土している。脚部を欠くが、器台部の口縁部の拡張が弱く、くびれ部は中位にある。身部は不均等な逆涙滴型の透孔が5方向に穿たれている。器台部内面以外は緻密なヘラミガキが施されるが、胎土は精製されたものではない。身部の口縁部の拡張がやや強いが、器台部の形状から後期Ⅲ-1と見られる。古殿遺跡では破片も含め5点が出土しているが、全体の形状がわかるのは土器溜まりSX11から出土した1点(5a)のみである。ほぼ完形で、身部の透孔は逆涙滴形で4方向に穿たれる。内外面とも緻密なヘラミガキが施されるが、胎土はわずかに砂粒を含む。後期Ⅲ-2とみられる。西谷2号墓(9)では墓壙脇の土器溜まりから完形のものが出土している。身部の透孔は逆涙滴形で5方向に穿たれるが、その間隔は一定ではない。内外面とも緻密なヘラミガキで、砂粒はほとんど含まない。松田B16号墓(4)では、墳丘裾部に置かれた状態で出土した。器面は摩滅が著しいが、胎土中には砂粒をほとんど含まない。身部の透孔は逆涙滴形で4方向である。先述の西谷2号墓や古殿遺跡SX11よりも器台部、身部とも口縁部の拡張が上斜め方向に大きく、後出する後期Ⅲ-3と見られる。

以上のように、後期Ⅲにおいては器台部の器形の変化はあるものの、器高や身部の幅・高さは一定しており、透孔についても逆涙滴形で4方向ないし5方向とほぼ変化がない。この特徴は他の破片資料についても共通することから、丹後における定型化した装飾器台の特徴と理解できる。岸岡がすでに指摘しているように、器形の変化に乏しく、規格化された一群と見られる。なお、但馬の2点(14・37)は、図では涙滴形だが、欠損のため判断不能である。

終末期の事例は少ないが、浅後谷南遺跡例(1)のように、北陸系統の土器群の影響で器台部の形状が変質しつつ、小型化し、装飾器台は消滅すると考えられる。

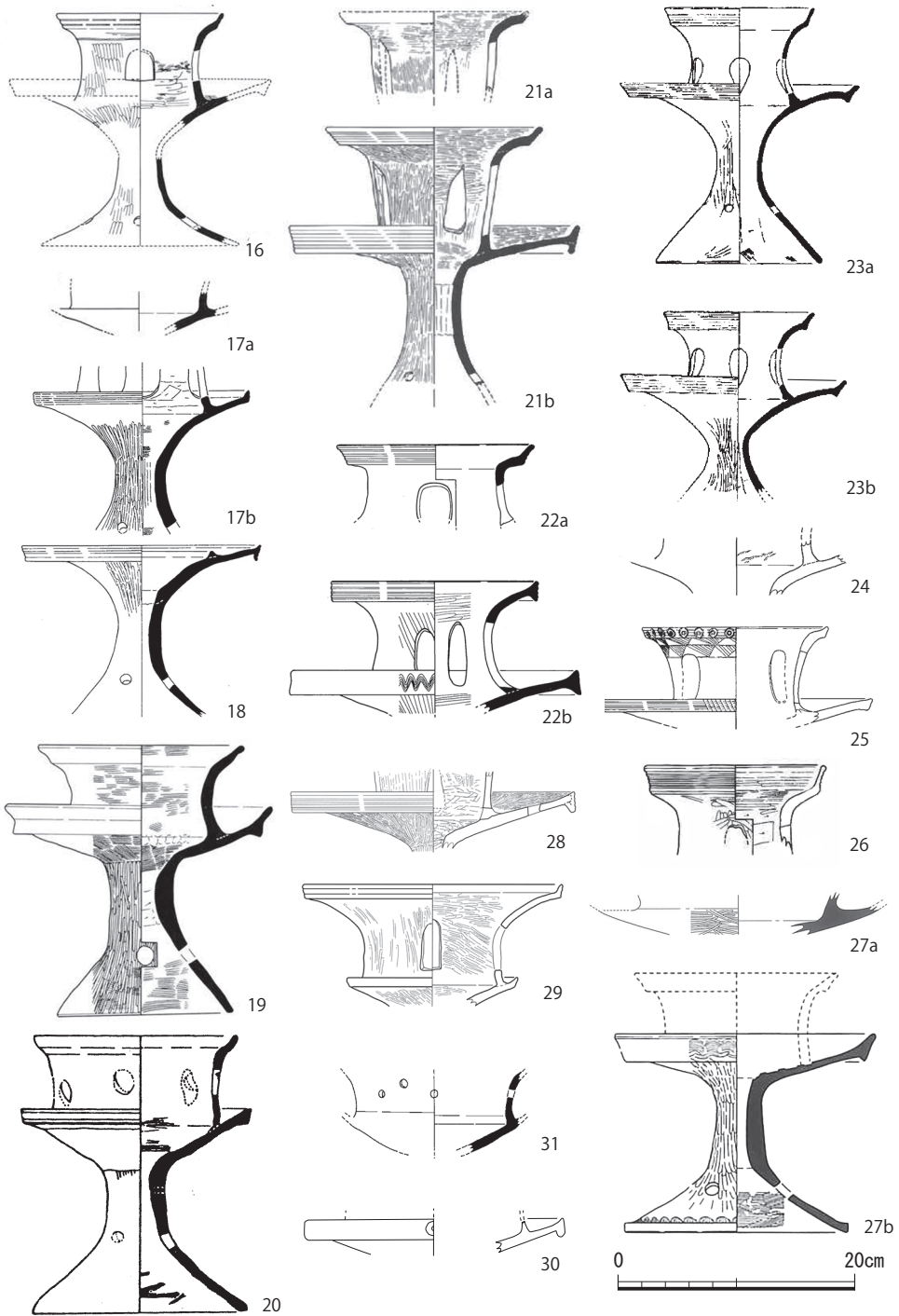


図3 近畿北部型裝飾器台の諸例(丹波・摂津・播磨)(番号は図1に対応)

(3) 分布と展開

次に、周辺地域の事例を検討していこう。丹波では比較的出土事例が豊富である。時期がわかるものでは、丹波市谷川踊場遺跡の竪穴建物から出土した事例(23a・b)があり、器台部の形状から丹後後期Ⅲ-1に位置付けられる。透孔は逆涙滴形のものが4方向に穿たれるが、透孔の大きさは少し小さく、器高もやや低いなど、若干丹後の事例とは異なる点もあるが、忠実に模倣されたものとみてよい。一方、谷川踊場遺跡で出土した2点以外をみると、丹後のものとは以下の点で異なる特徴をもつ。

①透孔は正位置の涙滴型ないし楕円形で、方向も4方向よりも少ないものが主体。②身部は横長のものが多い。③器台部が在来系統の器台となっている例がある。

特に透孔の形状は丹後では全てが逆涙滴形で統一されていることと対照的で、①は丹波で受容した型式と考えられる。丹波以南では播磨の加古川流域あるいは摂津や山城で点々と分布があるが、いずれも上述のような特徴をもつことから、丹波で受容されたものがさらに変容し、近畿北部型の装飾器台の「範型」のみが共有されたものと考えられよう。

若狭においては、出土例が少ないが、近畿北部型とみてよい装飾器台が5遺跡で出土している。注目したいのは、いずれの遺跡でも、身部が横長で、かつ透孔の形状が三角形あるいは楕円形で上下違えながら連続して穿つという、北陸南西部型が出現期から備える特徴を持つことだ。北陸南西部で装飾器台が出現するのは後期後葉の月影式であり、近畿

北部より若干後出するとみられる。この特殊な器種の出現の背景に、先行する近畿北部型の範型が共有されていた可能性は高いが、丹後における典型的な装飾器台とは型式学的なヒアタスが大きいことが障壁であった。若狭は丹後と北陸の中間点にあたるだけでなく若狭出土の近畿北部型装飾器台は北陸南西部型にみられる特徴も有しており、その成立を考える上では重要である。若狭出土の資料はいずれも共伴資料から時期を絞り込むことができず、詳細な検討を行

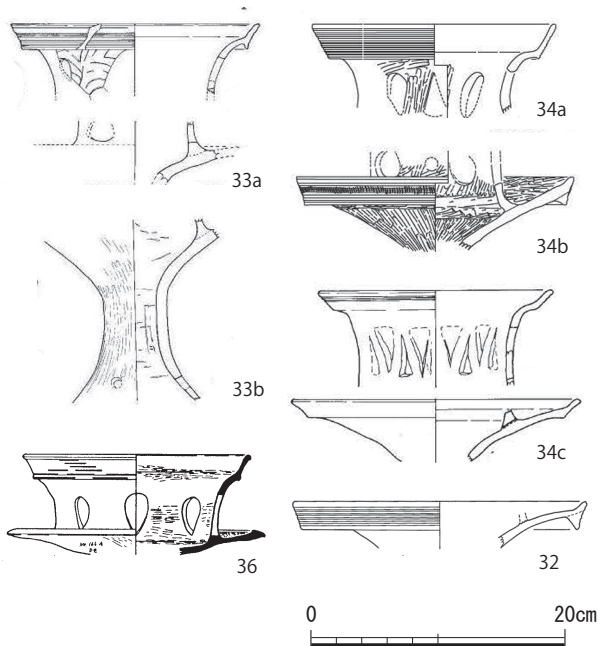


図4 若狭における装飾器台(1:6)

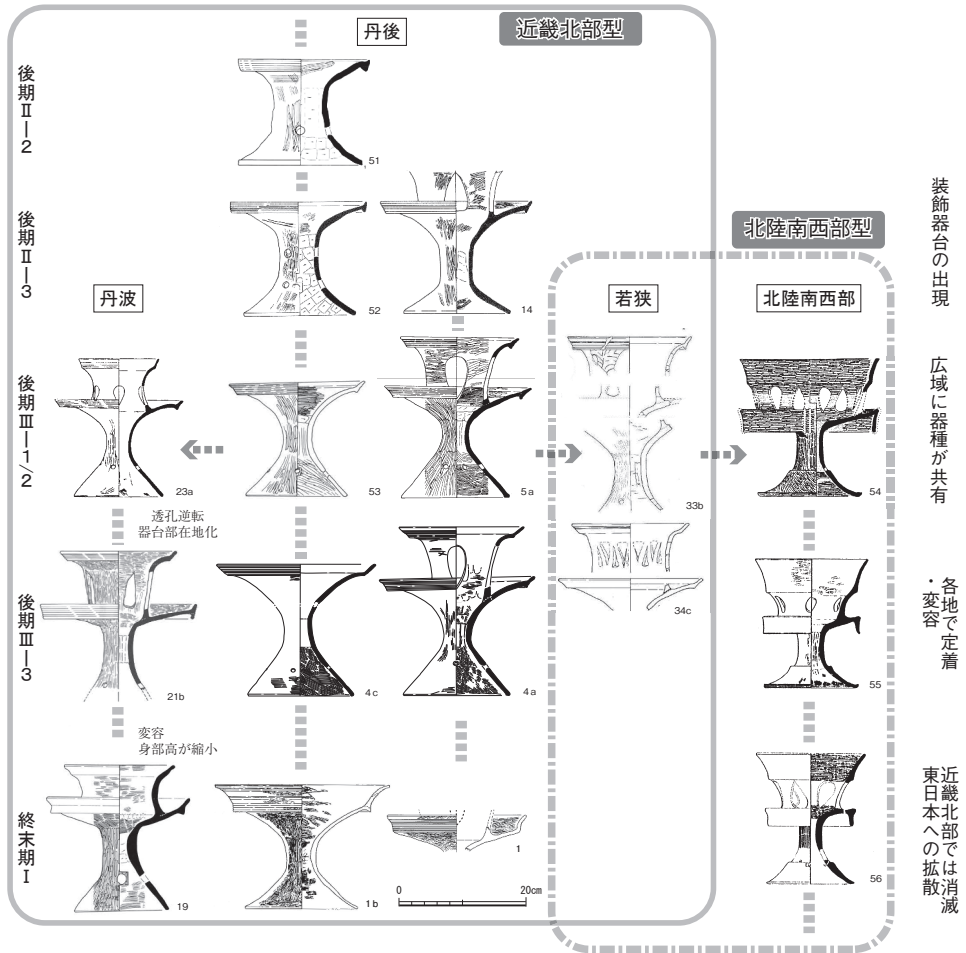


図5 近畿北部型裝飾器台の地域性と展開過程(1:12)

うことが難しいが、北陸南西部型成立のベースとなっている可能性を指摘しておきたい。

4. 裝飾器台と精製土器群の成立

本節では、①裝飾器台出現以前の器台と土器のセット関係、②裝飾器台と精製土器群の共通性に着目し、裝飾器台の成立の背景を検討する。

近畿北部では、後期後葉に器面を緻密にヘラミガキを行う土器群が成立する。多くは赤褐色系の焼き上がりを呈し、混和剤としての砂粒を含まないもので、裝飾器台のほか、有段口縁高杯や台付裝飾壺、小型把手付壺、台付甕などがある。一方それ以外の甕、壺類の多数、水差し、鉢は、外面はハケメ、内面はヘラケズリを多用し、淡灰色系あるいは褐色系の焼き上がりのものが多い。また、それらとは別に、指ナデや疎らなハケメを残す粗雑

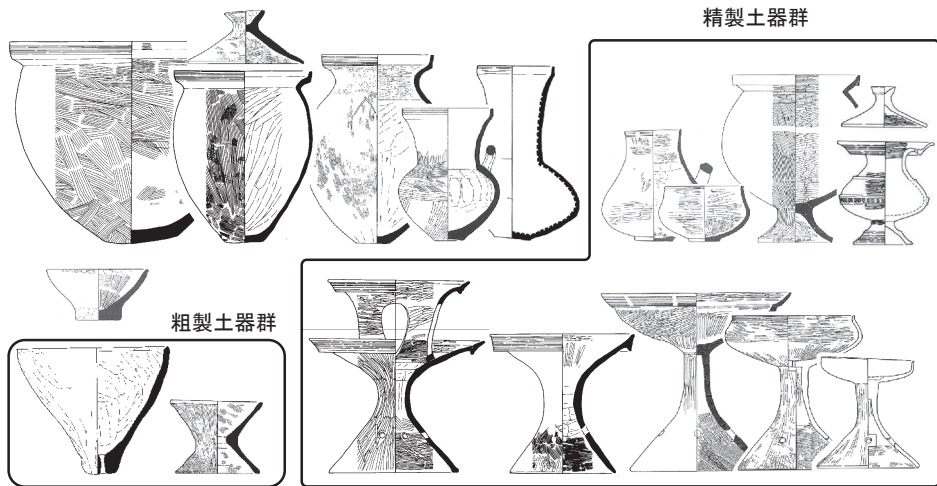


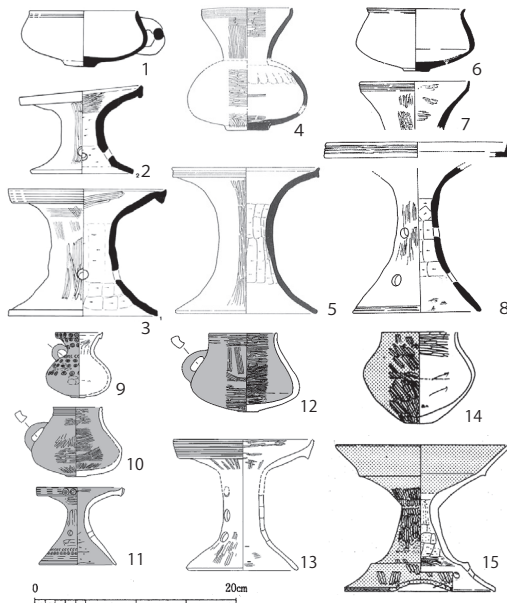
図6 近畿北部における後期後葉の主要器種(1:12)

な調整で器壁が厚い一群として、有孔土器や粗製器台がある(図6)。^(註10)

精製土器群を構成する器種は後期初頭から存在するわけではなく、多くは後期中葉(後期Ⅱ)の中に端緒があり、後期後葉(後期Ⅲ)になって定型化する。精粗の作り分けが最もはっきりとする後期Ⅲの出土状況を見ると、集落では精粗を問わずに出土事例があるのに対し、墳墓においては、明らかに供献土器が精製土器群に偏りが認められるようになる。後期Ⅱ中頃には、土器配置の位置が墓壙内から墓壙上あるいは墳丘上となり、組成から甕・壺といった日常容器類が欠落し、精製土器群が供献土器の主体を占めるようになっていく。精製土器群は本論で検討した裝飾器台を含め、台付裝飾壺や台付甕、あるいは高杯など脚台をもつものが主体となる。繰り返しになるが、これらは墳墓供献に特化した一群ではない。墳墓における土器供献の変質が集落の土器様相にも影響を及ぼしていると考えられよう。

したがって、裝飾器台の創出を検討するためには、裝飾器台出現以前に器台とセット関係^(註11)をなす器種を検討する必要がある。丹後において、器台とのセット関係がわかる事例としては、西小田墳墓群や大山墳墓群の事例があり、小型の精製把手付壺や精製長頸壺が伴っている。周辺地域に視野を広げたとき、小型把手付壺は島根県西谷3号墓や富山県南太閤山6号墓などで器台に伴って出土しており、器台との親和性が高いことは明白だ。つまり、器台とセットをなす土器は精製の小型壺類に限られており、その容量や形態は限定的なのである。

裝飾器台の身部は、外面の仕上げに横方向のヘラミガキが施されるが、器台とセットとなる精製把手付壺や精製長頸壺についても、同様に横方向のヘラミギキで仕上げられている。



1～3：西小田 土器溜 4・5：大山周辺 23 主 墓壙上 6～8：古天王5号墓
9 主墓壙上 9～13：西谷3号墓 墓壙上 14・15：南太閤山6号墓 北溝

図7 器台とセットをなす土器(1:10)

る。器台と壺がセットとなる儀礼が定型化する中で、両者が結合して仮器的性格を強めていったと考えられよう。

装飾器台の創出については器台を重ねたという理解もあるが、装飾器台出現前の精製土器群のセット関係からみると首肯し難く、やはり精製の小型壺あるいは長頸広口壺を想定するのが妥当であろう。

5. 結語

本論では近畿北部型装飾器台について改めて資料集成を行い、型式学的特徴を整理した上で時期的変遷を整理するという基礎的な作業を行った。そして、近畿北部型装飾器台について地域

性があることを示し、その中でも丹後より東の若狭周辺の一群が北陸西部型成立の祖型となった可能性を提示した。

装飾器台は、近畿北部の後期土器様式あるいは墓上祭祀を背景に誕生した、いわば近畿北部の弥生後期の社会を象徴する器種である。台付装飾壺や小型把手付壺など他の精製器種群を含め総括的な検討を行うことで、よりその意義付けは明らかになるだろう。

(きりい・りき = 京都府教育庁指導部文化財保護課副主査)

本論は、令和6年に丹波市で谷川踊場遺跡の土器見学会の際に得た知見が元になっている。その際、西岡万里氏、安平勝利氏はじめ参加者の皆様には諸々ご教示いただいた。また、次の機関に資料調査等でお世話になった。記して感謝申し上げる。

出雲弥生の森博物館、加古川市教育委員会、多可町教育委員会、丹波市教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、豊岡市教育委員会、兵庫県立考古博物館、福井県埋蔵文化財センター、与謝野町教育委員会

注1 本論の時期区分は以下の文献による。(後期前葉：後期Ⅰ、後期中葉：後期Ⅱ、後期後葉：後期Ⅲ)
桐井理揮2025「近畿北部の土器編年－弥生時代後期から古墳時代前期－」『越佐から見た列

島の交流と地域社会』日本考古学協会2025新潟大会研究発表資料集 日本考古学協会2025新潟大会実行委員会

- 注2 栃木英道・宮本哲朗1981「装飾性を帯びた器台形土器(いわゆる装飾器台)について」『南新保D遺跡』金沢市文化財紀要26 金沢市埋蔵文化財センター など
- 注3 楠 正勝2003「装飾器台の成立と展開」『庄内式土器研究』26、庄内式土器研究会
- 注4 堀 大介2009「装飾器台の成立」『地域政権の考古学的研究－古墳成立期の北陸を舞台として－』雄山閣
- 注5 利根川章彦1999「北陸系装飾器台の系譜についての小論－いわゆる「特殊な器台」について－」『研究紀要』第15号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団／滝沢規朗2005「新潟県における古墳出現前後に盛行する装飾器台・結合器台について」『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 注6 野村高広2013「古墳時代前期東日本における高坏状装飾器台」『東京大学考古学研究室研究紀要』東京大学考古学研究室
- 注7 岸岡貴英1991「京都府北部出土の装飾器台について」『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注8 前掲・堀2009、野村2013に同じ
- 注9 桐井理揮2025「擬凹線文土器様式の変遷－大山式・西谷式の再検討－」『京都府埋蔵文化財情報』第149号 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注10 これらの土器群については、精粗を問わず擬凹線文を多用し、内面の最終調整にヘラケズリを施すという共通した製作技術体系の元に製作されていることから、あくまでも同一の製作集団による精粗の作り分けが行われていたと想定する。
- 注11 ここでは、墓壇上供献土器で器台を含むもののうち、単独で存在する高杯や、明らかに使用用途が異なる甕を除いた器種を提示する。

図出典

(付表・第2～6図) 1 浅後谷南遺跡：石崎善久・黒坪一樹 2000「浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報』第93冊、2 途中ヶ丘遺跡：釈龍雄編 1977『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』峰山町文化財調査報告第3集、3 松山遺跡：奈良康正 2011「松山遺跡第4次」『京都府遺跡調査概報』第146冊、4 松田B16号墓：菅 博絵 2025「京丹後市松田古墳群B支群(松田墳墓群)の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第148号、5 古殿遺跡：鍋田 勇・戸原和人 1988『古殿遺跡』京都府遺跡調査報告書第9集／(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989『京都府弥生土器集成』、6 正垣遺跡：竹原一彦 1987「正垣遺跡」『京都府遺跡調査概報』第22冊、7 三重遺跡：神尾恵一 1972「京都府竹野川中流域(中郡)の弥生遺跡」『同志社考古』9、8 温江遺跡：岩松 保 2010「温江遺跡第6次」『京都府遺跡調査概報』第139冊、9 西谷2号墓：(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989『京都府弥生土器集成』、10 石田谷遺跡：岡崎研一 2014「石田谷遺跡第2・3次」『京都府遺跡調査概報』第158冊、11 山田黒田遺跡：前掲岸岡 1991、12 桑原口遺跡：奥村清一郎・石井清司 1997「桑原口遺跡」『京都府遺跡調査概報』第75冊／田代 弘 1997「桑原口遺跡3次」『京都府遺跡調査概報』第82冊、13 浦入遺跡：辻本和美編 2001『浦入遺跡群』京都府遺跡調査報告書 第29集、14 妙楽

寺墳墓群：瀬戸谷皓編 2002『妙楽寺墳墓群』豊岡市文化財調査報告書第32集、15 若水 A15号墳：岸本一宏編 2009『若水古墳群・城跡』兵庫県文化財調査報告第364冊、16 青野西遺跡：小山雅人編 1985『青野西遺跡』京都府遺跡調査報告書第4冊、17 唐部遺跡：三好博喜 2002『長砂南遺跡・唐部遺跡』綾部市文化財調査報告32、18 新庄遺跡：三好博喜編 1995『新庄遺跡』綾部市文化財調査報告第22集、19 北金岐遺跡：石井清司編 1985『北金岐遺跡』京都府遺跡調査報告書第5冊、20 塔遺跡：福島孝行 1996『塔遺跡』埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会、21 犬岡遺跡：山田清朝編 1995『犬岡遺跡』兵庫県文化財調査報告第147冊、22 七日市遺跡：種定淳介編 1990『七日市遺跡』(I) 兵庫県文化財調査報告書第72-2冊、23 谷川踊場遺跡：下山文隆ほか 2003『谷川遺跡群』『氷上郡埋蔵文化財調査概要報告書V』氷上郡埋蔵文化財発掘調査報告書第7集、24 横田遺跡：久保弘幸・鐵 英記 2006『横田遺跡・横田北古墳群発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書第303冊、25 ずえが谷遺跡：仁尾一人編 2013『三釈迦山北麓遺跡群』兵庫県文化財調査報告書第453冊、26 荒田神社裏遺跡：岸本一宏編 2001『荒田神社裏遺跡』兵庫県文化財調査報告第221冊、27 奥中・三内遺跡：安平勝利編 2023・2024『奥中・三内遺跡Ⅱ・Ⅲ』多可町文化財報告37・38、28 津万遺跡群：別府洋二編 2023『津万遺跡群1』兵庫県文化財調査報告第526冊、29 美乃利遺跡：山中リュウ編 2018『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅳ・美乃利遺跡発掘調査報告書Ⅰ』加古川市文化財調査報告29、30 川除・藤ノ木遺跡：山田清朝ほか 1992『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告第104冊、31 水垂遺跡：長宗繁一ほか 1998『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊、32 曾根田遺跡：清水孝之編 2014『曾根田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第150集、33 水崎遺跡：坪田聡子編 2010『水崎山城跡・水崎遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第113集、34 府中石田遺跡：田中祐二編 2011『府中石田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第121集、36 持明寺遺跡：坪田聡子 2000『若狭・越前における丹後系土器の様相』『庄内式土器研究』22、37 立石墳墓群：瀬戸谷 皓編 1987『北浦古墳群・立石墳墓群』豊岡市教育委員会（実測図は筆者作成）、51 西小田遺跡：三好博喜 1987『西小田遺跡発掘調査概要』『京都府遺跡調査概報』第24冊、52 古天王5号墓：横島勝則 2001『古天王墳墓・古墳群』『弥栄町内遺跡発掘調査報告書』弥栄町文化財調査報告第19集、53 太田4号墳下層：増田孝彦・石崎善久 1990『太田・下後古墳群』『京都府遺跡調査概報』第39冊、54 一塚21号墓：松任市教育委員会 1995『旭遺跡群Ⅰ』、55 伊井遺跡：金津町教育委員会 1995『金津町埋蔵文化財概要平成元～5年度』、56 戸板山1号墳：岩尾博之 1986『戸板山古墳群』今立町埋蔵文化財調査報告2

(第6図) 前掲注1・桐井 2025 から作成

(第7図) 1～3：前掲・三好 1987、4・5：平良泰久編 1983『大山墳墓群』丹後町文化財調査報告第1集、6～8：前掲・横島 2001、9～13：坂本豊治編 2015『西谷3号墓発掘調査報告書』島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館、14・15：久々忠義編 1984『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要2』富山県埋蔵文化財センター